

## 第 66 回クラシックを楽しむ会

2019 年 6 月 23 日 (日) 18:00～ (2 時間 35 分、休憩除く)

タイトル：歌劇「ランメルモールのルチア」(ドニゼッティ)

会場等：ウィーン国立歌劇場公演

2019 年 2 月 12・15 日

管弦楽：ウィーン国立歌劇場管弦楽団

ウィーン国立歌劇場合唱団

指揮：エヴェリーノ・ピド

演出：ロラン・ペリー

出演：オルガ・ペレチャツコ (ルチア)

ジョルジュ・ペテアン (エンリーコ・アシュトン卿)

フアン・ディエゴ・フローレス (エドガルド卿)

パク・ジョンミン (ライモンド)

その他



ペレチャツコ演ずる「狂乱の場」はまさに圧巻

### あらすじ

17 世紀末のスコットランドが舞台。兄エンリーコの政略のため無理やり結婚させられた妹のルチアが花婿アルトゥーロを刺し殺し発狂して倒れる。ルチアの不実を責めた恋人エドガルドもルチアの後を追う悲しい物語。



原作「ランマームーアの花嫁」の舞台ラマーミア丘陵は一面ヘザー(ヒース)に覆われている

### 聴きどころみどころ

ドニゼッティの最高傑作でベルカント・オペラの代表的作品。一番の聴きどころは正気を失った主人公ルチアが延々と 17 分強！も超絶技巧の難しいコロラトゥーラで歌い続ける「狂乱の場」。六重唱「このような瞬間に私を邪魔するのは誰だ」は同時に歌っているのにそれぞれの気持ちが伝わる名曲。最後のシーンでエドガルドが歌う 2 つのアリアもテノールの名アリアとして有名。

19 世紀前半「狂乱オペラ」が多く作られたが、この「狂乱の場」は最高傑作でまさに圧巻。ルチアは華麗な声の技巧とドラマティックな歌い方、演技が要求される難役として有名。

### 第 67 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「カルメン」(ビゼー)

7 月 21 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

1987 年メトロポリタン歌劇場公演。アグネス・バルツァとホセ・カレーラス、ほかにレオーナ・ミッチェル、サミュエル・レイミーと最高の顔ぶれ。ミルズ演出の豪華な舞台も見逃せません！

8 月は 2019 年 4 月英国ロイヤル・オペラ・ハウスのバレエ「ロメオとジュリエット」。主役は高田茜、平野亮一の二人。9 月以降、ザルツブルク音楽祭 2018 年 8 月の歌劇「スペードの女王」などを予定。

# あらすじ

## 【時と場所】

18世紀はじめのスコットランド\*。名門ランメルモール家とレーヴェンスウッド家は親の代からの敵同士。ランメルモール家の当主エンリーコの妹ルチアは敵方レーヴェンスウッド家当主のエドガルドと密かに愛し合い、結婚の約束を交わしていた。

\*1707年スコットランド議会はイングランドの圧力に屈して合同法を可決しスコットランド王国を消滅させ、合同法によりグレートブリテン王国が成立したがスコットランドにとっては屈辱的な内容だった。最後のスコットランド国王はイングランド国王と同君連合のスチュアート家アン女王で初代のグレートブリテン王国国王になったが、継嗣がなくスチュアート朝は断絶した。

## 【登場人物】

ルチア (S)	ランメルモール家エンリーコの妹。一族の宿敵エドガルドと恋におちる
エドガルド (T)	レーヴェンスウッド家の当主。ランメルモール家との戦いに敗れて没落
エンリーコ (Br)	ルチアの兄。ランメルモール家の領主でレーヴェンスウッド城を奪った。
ライモンド (Bs)	司祭でルチアの家庭教師。ルチアとエドガルドの恋の手助けをする
アルトゥーロ (T)	兄の政略のためルチアが結婚させられる相手
アリーサ (Ms)	ルチアの侍女
ノルマンノ (T)	エンリーコの忠臣の衛兵隊長

## 第1部「旅立ち」

### (全1幕) レーヴェンスウッド城内、場内の庭園

レーヴェンスウッド城はランメルモール家の領主エンリーコがエドガルドの父を殺して奪った城。エンリーコは傾きかけた家運を救うため、妹ルチアを政略結婚させようとしている。衛兵隊長ノルマンノから、ルチアが宿敵エドガルドと恋仲らしいと聞かされて激怒（「激しい苦しみ」）する。

そのルチアは今日も城内で密かに恋人エドガルドを待っている（「あたりは沈黙に閉ざされて」）。現れたエドガルドは、間もなくフランスへ旅立つので、その前にエンリーコと和解して結婚の許しを得たい、と言うが、ルチアは、それはかえって逆効果だといましめる。エドガルドはエンリーコへの怒りが燃え上がり、ルチアは慰める（二重唱「裏切られた両親の眠る墓の上で」）。そして互いの指に指輪をはめる。

## 第2部「結婚の契約」

### (第1幕) レーヴェンスウッド城内のエンリーコの部屋、大広間

エンリーコは偽のエドガルドの手紙をルチアに見せてエドガルドが裏切ったと思い込ませ、悲嘆にくれるルチアにアルトゥーロとの結婚を強要する。司祭でルチアの家庭教師ライモンドもルチアを説得して承諾させる。

大広間では新郎や客たちが花嫁を待っている。現れたルチアは結婚の誓約書に署名させられる。そこへエドガルドが現れ、ルチアの署名を見て逆上、2人で交わした指輪を打ち捨て、呪いの言葉を投げつける（六重唱「この瞬間邪魔するのは誰だ」）。

### (第2幕) エドガルドの城の中、レーヴェンスウッド城内の大広間、レーヴェンスウッドの墓地

エンリーコが嵐についてエドガルドの住まいを訪ね、2人は未明にレーヴェンスウッド家の墓所での決闘を約束する。一方、レーヴェンスウッド城内の大広間では絢爛豪華に結婚の祝宴が続くなか、ライモンドが一同にルチアが新婚の夫を殺して正気を失ったと知らせる。そこへ髪も乱れ血の気の失せたルチアが現れ、エドガルドとの愛の幻を歌うアリア「彼の優しい声が」はクライマックス、やがて息絶える（狂乱の場）。

その頃、何も知らないエドガルドは、死を覚悟してレーヴェンスウッドの墓地でエンリーコを待っている（「やがてこの世に別れを告げよう」）。ところが現れたのは葬列の一群。ライモンドから、ルチアがエドガルドへの愛のために狂って死んだことを告げられ、絶望したエドガルドは、ルチアと天国で結ばれることを願って自ら死を選ぶ（「おまえは昇天の翼をひろげた」）。

## 出演者

**オルガ・ペレチャツコ**（ルチア）（1980-）はロシア・レニングラード生まれのソプラノ歌手。ベルカント・オペラ、モーツァルト・オペラをレパートリーとしている。美貌と美声でアンナ・ネトレプコ 2 世との呼び声も高い。

**ジョルジュ・ペテアン**（エンリーコ）（1976-）はルーマニア・クルジュ＝ナポカ（コロジュヴァール、クラウゼンブルク）生まれのバリトン歌手。欧米の主要歌劇場で活躍中。

**フアン・ディエゴ・フローレス**（エドガルド）（1973-）はペルー・リマに生まれ。ベルカントオペラでは現代最高のテノール歌手である。ドニゼッティの「連隊の娘」のハイ C を 9 回連続で歌う、テノールにとって至難のトニオ役で名を馳せた。

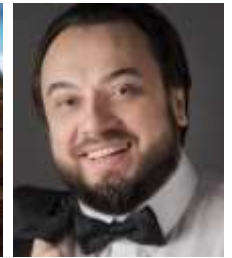
**パク・ジョンミン**（ライモンド）（1986-）は韓国・ソウル生まれのバス歌手。チャイコフスキー国際コンクール男性歌手部門で優勝。ヨーロッパの主要歌劇場で活躍中。

**エヴェリーノ・ピド**（指揮）（1953-）はイタリア・トリノ出身の指揮者。17 歳でミラノ・スカラ座に入団し首席ファゴット奏者として活躍。非常に難しいとされるベルカント・オペラを指揮する世界最高の指揮者のひとり。

**ロラン・ペリー**（演出）（1962-）はフランス・パリ生まれの演出家。コミカルで風刺的ながら詩情に溢れ想像力豊かな作風が特徴。特にフランスのオペラ、オペレッタの演出で名作を多く制作している。日本でもペリー演出のオペラ上演が人気を博している。



ペレチャツコ



ペテアン



フローレス



パク



ピド



ペリー

## 参考

### オペラの原作

歌劇「ランメルモールのルチア」の原作はウォルター・スコットの歴史小説「ランマームーアの花嫁」（初版は 1819 年）。小説の舞台は 17 世紀末、スコットランドの首都エジンバラの数十キロ東南のラマーミュア丘陵とその近郊。エジンバラ生まれのスコットはこの近郊に住み、実話の舞台であるスコットランド南西部地方も旅行している。



歴史小説「ランマームーアの花嫁」の舞台ラマーミュア丘陵

### ウォルター・スコット(1771-1832)

スコットランドのエジンバラ生まれの詩人、作家。ロマン主義作家として歴史小説で名声を博し、イギリスで初めて存命中の人気作家となった。なお、本業の弁護士を辞めた後、スコットランド最高民事裁判所高級書記官を続けた。イギリスの初代准男爵。なお、伝統あるスコットランド銀行発行のすべての紙幣にスコットの肖像が使用されている。

彼の作品は、ドニゼッティの歌劇「ランメルモールのルチア」以外に、ロッシーニの歌劇「湖上の美人」\*1 やビゼーの歌劇「美しきパースの娘」\*2 などさまざまなオペラの原作となった。なお、イングランドが舞台の歴史小説「アイヴァンホー」は歴史的な出来事と架空の主人公を取り入れる手法の元祖である。



スコット

\*1. だれもが知っている「シューベルトのアベマリア」はドイツ語訳による歌曲集「湖上の美人」のなかの一曲、宗教曲ではない。

\*2. ビゼーの「アルルの女第 2 組曲」中のフルートの名曲「メヌエット」は本歌劇中の二重唱の伴奏曲をギローが編曲したものの。

## 実際に起きた事件がモデル

スコットの小説はスコットランドで実際に起きた事件がモデルである。事件は1669年8月12日、スコットランド南西部の貴族ジェームズ・ダルリンプル一家で起きた。ダルリンプルの娘ジャネット（1656? - 1669）は親（反王権のホイッグ党）の意に沿わない男（ジェームズ派=ジャコバイト）\*1と密かに婚約していて、それを知った両親は激怒し、無理やり別の男\*2と結婚させた。結婚式の夜に悲劇が起き、ジャネットは精神に異常をきたしひと月後に亡くなった。なお、怪我を負った夫\*2は回復して再婚したが生涯事件について語らず真相は不明。一方、恋人を失った婚約者\*1は一生独身を貫いた。

\*1.アーチバルド・ラザフォード卿。\*2. バルドゥーン・ダンバー卿は後に落馬して死去。

## 実話の舞台

実話の舞台は小説の舞台であるスコットランド南東部から百数十km以上離れたスコットランド西南端、現在のサウス・エアシャー州とダンフリース・アンド・ガロウェイ州の地域。廃墟のバルドゥーン城はジャネットの命日に血の付いたガウンをまとった彼女の幽霊が現れるとか。

\* ジャネットの育ったカースクルー城はタワー・ハウスと呼ばれ要塞の塔部分だけが廃墟として残されている。



カースクルー城廃墟

幽霊伝説のバルドゥーン城廃墟

## 名門貴族ダルリンプル

原作のモデルであるジャネットの父**ジェームズ・ダルリンプル**（1619-1695）は法律家・政治家でスコットランド最初の法律書を出版した。この事件の後初代ステア子爵に叙爵。ジャネットの兄**ジョン・ダルリンプル**（1648-1707）は、後にイングランド王国のスコットランド担当國務大臣・司法長官で初代ステア伯を叙爵。**名誉革命**直後に起きた悪名高い極悪非道の「**グレンコーの虐殺**」首謀者の一人だが、なぜか**グレートブリテン王国**成立に重要な役割を果たしたとして歴史に名を留めている。



ジャネットの父ジェームズと母マーガレット

## 事件当時、17世紀のスコットランド

1603年、後継ぎのいないエリザベス1世の死で、メアリー・ステュアートの息子スコットランド王ジェームズ6世がイングランド王位を継承した。同時に、その後の1世紀はスコットランド独自の王を失い、次に独自の議会も失って、イングランドに吸収されていった暗い時代である。**清教徒革命**の原因のひとつとされる2度の**主教戦争**をイングランドと戦い、続けてスコットランド内戦、**クロムウェル**によるスコットランド侵攻、更に清教徒革命が失敗して1660年**王政復古**、「**殺戮時代**」と呼ばれる残虐極まる**長老派教会**弾圧は1688年の**名誉革命**まで続き、その後も反乱が続いた。1707年イングランド王国とスコットランド王国が合併して**グレートブリテン王国**が成立したが、これはスコットランドが最終的に独立を放棄した屈辱的な出来事で、現在も問題を引きずっている。

### 地図の補足説明

スコットランドはイギリス北部。エディンバラから北は山脈が連なる**ハイランド**と呼ばれる高地と離島の地方。スコットランド南部は**ローランド**と呼ばれる低湿地・丘陵地帯。この小説・歌劇の舞台はローランド地方である。



この小説・歌劇の舞台はローランド地方(○)